

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月3日(月)
部 会 名	中学校 総則部会

研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実(含む社会に開かれた教育課程の充実)

テーマ

「学習者中心の学び」から考えるカリキュラム・マネジメント

提案概要

提案校が属する総則部会では市の教育大綱の理念を踏まえ、「自立した学習者」の育成を目指すこととし、その際に必要な力を子どもたちが身に付けていけるカリキュラムデザイン・授業づくりについて検討を進めた。

- 教育大綱が示す行動指針である「学習者中心の学び」を支える4つの柱
 - ①ワクワクして未来を創る学びを生み出す
 - ②地域の宝物を活かし、生涯かけて学ぶ機会をつくる
 - ③多様性を尊重した学びで共生社会を共創する
 - ④学習者中心の学びを支える環境を整備する
- 「自立した学習者」の育成を目指すのに必要な力
 - ①自己学習調整能力
 - ②メタ認知能力
 - ③主体的に学習に取り組む力

▽実践例① 『個別最適な学びの具現化』

一斉授業・画一的指導の現状を打破し、目の前の子どもを起点とし、教師自身の指導を不断に見直す取組を行い、生徒と共に学び方をデザインしていく「共創」のプロセスを重視した授業づくり

- 具体的な実践
 - 「授業案(学習プラン)の活用」、「公開授業及び生徒による協議会の実施」
- 成果
 - ①単元の見通しを持ちやすくなる
 - ②生徒と協働し、授業研究を行うことで生徒から多様な授業アイデアが生まれ、子どもたちが自ら授業に関わっている意識を育てることができる
- 課題
 - ①自ら学び方を選ぶのが難しい生徒へのアプローチ
 - ②学ぶ意欲を引き出す問いの設定、丁寧な授業研究と魅力的な授業づくり

▽実践例② 『学びの構造転換』

教員ではなく、学習者の視点に立ち、「学びの構造」に注目をして研究を進め、子どもたちが自分の学び方を自ら選び、その選択を通して、学び方を学ぶことを大切にしたい

- 具体的な実践
 - 「学習者が学び方を自分で選べる状態の設計」、「学びの質の保証」、「学びを自分でデザインする力の育成」
- 成果
 - ①教員の取組に変化が見られる(多くの教員がルーブリックの活用するようになった)
 - ②生徒が自ら学び方を見出し、主体的に取り組む力が育まれている
 - ③ICTの有効活用ができる(ウェブ検索やAIをうのみにせず、生徒同士や教員との対話を通して検証する習慣)

●課題

- ①問題に対して、基礎が十分でない生徒などに対して、学びを焦点化するための手立てが必要
- ②学ぶ環境とツールはあるが、それらを生徒が目的を明確にし、選択・活用する力の育成
- ③目指している授業についての理解のための継続的な保護者への発信

質疑応答

- 実践例②について、形成的な評価として、自己調整を促すためにルーブリックを活用したとあるが、評価基準とどう区別しているのか？
 - ルーブリックによる評価は基準を明確に設定するのが困難であり、また、生徒の関心が評価基準を満たすことに集中してしまうことがあるのは、十分に理解している。あくまで、今回の実践例②では、生徒が自分の力や学習状況を把握し、学び方に生かすものとして捉えている。

協議の柱及び協議概要

- 参加者の地区・校種が分かれるように5～6人のグループを作り、次の協議の柱を①教師の役割、②自己調整、③学びの構造転換、④個別最適な学びの4つの視点から話し合った。
- 「学習者の視点に立った授業改善」に向けた各校の取組
 - ・自己調整の視点から音楽の実技テスト・体育のマット・跳び箱の授業の際、教師がいくつか提示するものの中から自分で受けるものを選択させる形をとっている。この場合はモニタリング、ファシリテーターが教師の主な役割となる。
 - ・個別最適な学びの例として、数学の問題を難易度別に大量に用意しておき、生徒は問題クリアしたら、ハンコをもらい、次の問題へと進める自動車教習所スタイルで行っている。

まとめ概要

今回の研究発表を通じて、「自立した学習者」に必要な力である「自己学習調整能力」、「メタ認知能力」、「主体的に学習に取り組む力」を育成するためには、①「自律」と「自己調整」の重視、②対話と協働による学び、③「選択」と「決定」の機会の設定、④教員の役割の捉え直しの4つを実施していくことが大切であることが分かった。

助言者からは、学習者中心の学びの実現をしていくためにも、今後は次期学習指導要領等の改訂に向けた動きやスケジュールをしっかりと理解しておくこと、そして実際に教育課程柔軟化サキドリ研究校が、どのような取組をしているのかを確認しておくことが大切だということを助言していただいた。